

5月3日の会通信 2号

発行 東日本連絡センター
1970・8・25

本号の内容

〈署名に対するお礼の言葉〉 小川正己

〈松下旭分物碎絶決起集会への発言 菅谷規矩雄

東大斗争と東大独文院生についての日録的レポート 一会員

慶応ドイツ語教員の実態 田中昌子

会誌報告

センターからのあたより

(他に岡山大学関係の資料を同封します)

§ § § § § §

〈署名に対するお礼の言葉〉

〈不利益処分事件〉で、かくも早く署名を寄せて下さったことに対して(別紙参照)、提案者として、心からお礼を申しあげます。署名とともに色々な感想をいただきましたが、私としましては、この署名運動をきっかけに誕生しました〈五月三日の会〉にそれら一切(特にいただいた各大学の状況の報告に關しては)が反映されることを願って、いちいちご返事を差し上げませんでした。しかし署名が一段落終った今の段階で、お礼とともに、それらの感想を直接いただいたものとして、御返事になるかわかりませんが、一筆書かしてもらいます。

まず署名に關しては、判断するための資料が乏しいというご意見、さらに署名の有効性に対する疑惑があったと思います。しかし私たちの学校の

内外を支配しつつある厚い壁を思えば、勿論私たちは一回切りの署名運動でこと足れりとするものではありません。むしろこの署名をきっかけに、この署名運動の精神を執拗に襲ってゆかねばならないと思ってます。私たちが署名運動について〈五月三日の会〉を発足させた理由です。若し有効性を求めるならば、そのような執拗さにあるのではないのでしょうか。さらに判断の資料については、順序が逆になりますが、以上のような理由で〈五月三日の会〉の主要な仕事は「各地の大学教員に対する処分や規制の実態を把握すること」、すなわち資料を提示すること、というよりは私たちが互いにそのような情報を交換しあうことです。基本的には私たちは私たちの学校の〈特殊〉のなかで闘ってゆかねばならないと思います。しかし〈五月三日の会〉はそれら〈特殊〉に対して〈共通〉の場をも築いてゆくことを努力の目標にしていると思います。

以上で署名運動と〈五月三日の会〉との関係について毅然とされなかつた方に対するお答えにもなつたと思いますが、〈五月三日の会〉が〈共通の場〉を志向する意味で、調査報告と救援活動をその仕事の内容とすることをここに再びくりかえして述べておきます。勿論この会が積極的なものになるか消極的なものになるかは、私たち会員の熱意にかかっていることは申すまでもないことだと思ひます。(小川正己)

〈松下〉処分粉砕 総決起集会(8・12 神戸)への発言

神戸大学評議会は、ひとりの〈松下昇〉を〈処分〉しようとしている。

各評議員(及びかれらを〈代表〉に並びだした教授会構成員たち)は、ひとりの〈松下昇〉が十人であり百人であったら、〈処分〉をためらい、あるいは放棄するであろうか。

いや、〈処分〉の権限なるものがそもそも〈回家=法〉によって与えられたものであり、かつかれらは〈大多数〉の〈代表〉たるゆえをもってこの権限を行使するのであるから、〈大多数〉が〈回家=法〉の存立基盤とされているフルジョア民主回家においては、かれらは〈無限〉にこの権限を〈私有〉しつづけるであろう。

いうまでもなく回家権力とか支配階級とかは、特定の個人・集団のごとくにして、〈私〉たちから遠くはなれたピラミッドの頂上に住みついているわけではない。

〈大多数〉の個人が、生活社会のなかで、どこまでもこの〈大多数〉の存在という仮象に、みずからの〈生活〉を帰属せしめんとすることじたいが、〈権力〉の深化であり強化であり、〈回家〉の永続化なのである。

神戸大学評議会=各教授会の構成員が、〈大学自治=正常化維持〉を名目にして〈松下処分〉を弱しうる根拠は、〈研究〉でも〈教育〉でもなく、〈回家=法〉のなかでしか存在しない。

かれらは〈処分〉に加担することで、なにを〈表現〉しようとしているのか。

もともと〈回家〉に限定されたものであるかれら〈回家公務員〉の〈生活〉じたいを、あらためて〈回家〉の存立基盤のなかへいっそう深入りさせることである。これが大学闘争の全表現をひたすら圧殺してきたかれらにもたらされる、反作用=反動の結晶なのだ。

にもかかわらず、かれらは〈回家〉にたいしては〈大学の自治〉を〈無限〉に強調する。この二重性こそ、〈私〉たちがどこまでも打倒の対象とすべきもの、大学闘争の真の課題である。

〈神戸大学〉というひとつの共同社会が、ひとりの〈松下昇〉を〈処分〉し排除せんとすることは、〈大学〉という共同性を、構成員個々人が、みずからの内部に幻想的規範力としてとどめておくことができず、〈授業〉という自他への強制力、さらには〈処分〉という他者への暴力にまで疎外=現実化せずにはいられない、〈反動=反革命〉の過程にあることをしめしている。

この〈反革命〉の陣営=〈大学〉のただなかへ、〈私〉たちがいまつきだしてゆくべき〈処分〉粉砕闘争は、決して諸〈権利〉の主張ではない。〈私〉たちの生活と存在を、かれらの〈階級性〉の内部に包摂せしめ、許容せしめ、疎外を解消することを要求するものではない。かれらの〈階級性〉にたいして、〈私〉たちが〈表現〉すべき〈私〉たちじしんとは、いっさいの〈権利〉を拒絶し放棄したときに〈私〉たちがなにもものでありうるか、という存在の苛酷な階級性であるはまだ。

この苛酷さのうえにたちるときこそ、〈私〉たちは〈松下処分〉粉砕闘争を、〈私〉たちすべての固有の闘争としつつ、同時に真の共闘の戦線をきりひらくものとしうるであろう。この課題にたえることが、〈私〉にとっての〈処分〉粉砕闘争であり、〈授業〉拒否永続化の意味であるとおもう。

〈六甲空間〉における総決起集会が、〈私〉たち個々の抵抗拠点として、みえざる共闘の戦線を〈表現〉するなにものかとなることを期待して、〈私〉および〈解放学校〉からの発言をおくりとどけたい。

1970年8月8日

菅谷 規矩雄

東大闘争と東大独文大学院生(68年9月から69年5月まで) についての日録的レポート

「医学部の斗争に端を発し、大学当局による6月17日の牀動隊導入を
事の直接的契機として全学的に拡大された斗争は、夏休み明けをむかえて
も当局の望んだように解決せず、東京大学は『新たな活気ある教育と研
究の場』(8.10告示)とはならなかった。東大斗争全学共闘会議は『七
項目の要求』を掲げつつ、更に、一方的な試験、授業再開を阻止すると同
時に、大学側の責任が明らかにされていない『告示』を粉碎すべく声を
強化しつつある。このような状況にあつて、我々独文科大学院生は何をし
てきたであろうか? 私たちは確かに、6月17日の牀動隊導入の際には
即時立ち上り、学科へ結集し、学部学生、教授、助手、院生の討議の場を
もった。しかし、その後6月28日の総長所信表明、8月10日の『告示』
などを経ながら、またこれらに対する入文院生の集会ももたれていながら、
独文大学院生の討議は一度もなされず休み明けをむかえてしまったのであ
る。『いっか、誰かが、何とかするだろう』と傍観していたと言われても
返す言葉に窮すると言つてもよい状態であつたのである。このことは、6
月段階の我々の動きが、警察力導入に対する感情的反発に終つてしまい、
真態を真に自らのものとする事が出来なかつたということでもあろうが、
より本質的には、我々の大学院生という在り方の曖昧さに由来すると思わ
れる。即ち、文学研究をしている、又はしようとしている者であり、同
時に学生であるという私たち自身の在り方の社会的意味について、私たち
が互いに話しあつていくということから余りに疎遠であつたからであらう
し、又、そうした討議の場を保障し、意志を決定し、活動する組織を何ら
もつていなかつたということでもあろうと思われる。.....」(68年

9月30日発行パンフレットより、原文のまま)

このようにして、生まれて始めて院生の討議集会がもたれたわけであるが、
以下にその簡略な記録を示す。

9・19 — 11名 ○ 独文大学院討議資料のレポート(東大斗争に向
するこれまでの過程のレポート、大学院生の研究への自向、斗争への参加、
自治会結成の理念、研究室問題 etc.) ○ 定期的会合をもちたい、研究
についての相互討議をしたい、就眠について等々の意見が吐かれるが、自
治会結成については今後の討議の深化をまっとする。

9・28 — 15名 ○ 自治会結成の是非について(いわゆるセクトの
政治的引きまわしをおせける声多し)

10・7 — 16名 ○ 自治会結成の目的について 東大斗争への参
加、研究室問題解決のために自治会が必要という声多し、なあ、作る必要
至くなしとの硬硬意見3入(入文斗争委員会の方針として、各科に自治会
を結成し、それの連合体を作り、現在有名無実の親睦団体「入文会」—
民青系多し— にとつてかわるといふことが背景にある)

10・16 — 13名 ○ 自治会結成ということになり規約草案委の選出。

10・25 — 17名 ○ 規約承認、自治委員三名選出。 ○ 入文会規約
改正案(入文院改) — 民青 — の問題(独文内発的自治会理念に反つた
るとして却下)

10・29 — 独文、教授、院生、学部生、助手 ○ 教授会について —
教授 — 教授会の無能は大学の本質、教授会の公断は不可能。 学生 —
大学の自治は教授会の自治ではない、学生参加。 ○ 大学院の授業につ
いて(大学院は自治組織がなく、従つてスト権もなく、たゞ学部のストラ
イキ体制にのつて何とか授業が行われていないという事態にある。) 当
面の問題解決が先決で、授業を今することは妥当でないとする意見多し。

10・30 — 14名, 助手2名 ・授業について — 今はやるべきではない
ということになる。 ・大衆団交について (その形態が良いか悪いかの
感想の述べあい) ・校動隊導入について

11・1 — 教授, 院生, 学部生, 助手 ・学部報告, 院生報告, 教授
報告 (教授会は善意で努力しているとのこと) ・学生の大学自治への
参加について (学生 — 学生・教員の無原則的参加, 教授 — 学生参加は
案件によりけり)

11・13 — 17名, 助手2名 ・文・無期限国交 (いわゆる村岡題)
について。 ・人文系大学院の横の連帯について。 ・修士論文提出
について (各科でストライキ宣言, 論文ボイコットが続出している) 様子
まちにしようとの声多し。

12・7 — 14名 ・12月2日の「加藤提案」, それに答える民青
系「統一代表団選出運動」, 及び全共斗のいわゆる「ホツタム自治会終身
証」の中であって独文自治会はその無内容ぶりを暴露。

・授業について (モウスコシマツテミル) ・卒業について (ホントハジ
タイケド, ウシロメタイ) [カ文対おぼんとの意見である] ・要求事項につ
いて (これは民青系の統一代表団のもつていくものとして — ホントニ, ヨ
ーキューアンノカナア)

12・23 — 大学院, 学部, 教授 ・文・返分白紙撤回問題に関して,
オスカーバー問題について。 ・卒業問題について。

1・16 — 院生 全共斗の論理がわからぬ, 民青の動きに失望などの
声あり。

1・20, 21 — 学部, 院生, 教授

・18, 19日問題追求 ・文学部要望書について ・大学院入試問
題について ・確認書について ・文返分問題について

このあたりから, 救済運動の一環として, 全口の独文研究者のうち何人か
に文書でカンパを要請。現金7千円, その他パンフレットなどの返事を十
数名から受けとる。

3・31 — 独文学科共斗, 結成準備会。独文院生6名, 学部生5名
・民青ホッチアケ学生大会紛争, 教授会解体, M.C, D.C入試紛争, 青年
独文研究者共斗という全口組結のよびかけ。

この間, 文学部教授追求集会在しばしばある。

5・28 — 13名 ・二期自治委員選出。

この後, 一回も独文院生の集会はもたれず, 現在(70年3月)に至る。

結局, 自治会結成運動以外は, ただ「事の終わった後で」喫茶店に集って,
感想を述べあっていたというだけのものにすぎなかったと言ったら余りに
低次元の坊主カソクになってしまうだろうか? 我々は結局, 全く主体的
なかわりが欠如していたのであり, 結果現象の暴露が, 批判そのもので
あるかのように考える傾向に支配されていたりで, 独文院生の間に芽生え
たさやかな動きは, あっという間に雲散霧消してしまったともいえる。
このことに関する主体的反省は, これに係ってきた院生一人一人にかけら
れているのであり, 真剣な切問が待たれるのであるが……

(一会員より)

慶応ドイツ語教員の生態

『東大・日大闘争は何を明らかにしたか? — 我々自身の体制的〈真〉である。たしかに我々も〈自主改革〉に反対して闘った。だが、我々は、ある《やるせなさ》の中で、授業に、研究(?)に、復帰した。— それで、自主改革慶応〈社中〉の中味そのものである、ということを知りながら。』とビラ(今年三月院生研究室強制移転闘争)はいう。

慶大では昨年九月、校動隊導入 — ロックアウト — 一方的全学集会 — 授業再開 — 自主改革路線という当局の大学立法的状況に抗議して、院生が授業ボイコットに入った。

しかし、独文院生=教員予備軍はどう対応したのだろうか、ドイツ語教員はなにをしたらだろうか、どこにいたのだろうか。

文学者佐藤新塾長は大学立法無用論なる形ばかりの反対声明、社会的視野を欠いた、大学の根本姿勢を福祉精神をもちだして抽象的に歌いあげ、国家権力からの統制を否定するかのごときポーズをとったが、他方において権力に依拠するという大学の危機を自ら生み出していく事態を日一日さらけ出した。文学研究者としての自己はさらりと捨て、封鎖解除後は物的管理者として声高に〈整存亡の秋〉だとののしり、キャンパス中にく〈社中一致〉なる私学ナショナリズムをこぼませ、その妨げになる全共闘53名を生贖として権力に捧げた。危機感にあびえた教員の多くはこれに従い、当局のとつた一連の処置の正当化にかりだされた。既に真剣に取り組んでいた専攻生とちがい、独文はこの時になってようやくクラス討議(?)なる場をもった。学内声題以前に全日学園闘争があった。研究で没頭していたといえ、独文院生はほとんどが教壇に上る過程にある、無関心でいられようはずがない。井の中の蛙的態度を反省した。

こうした院生をとり囲んだドイツ語教員の対応は、ほとんどが研究・教育者としての論理と倫理の一貫性を欠き、制度及び組織に対する忠誠の徒としてのそれであった。中教審路線をいく通信教育問題で夏休み中動きまわったA先生は執行部の一員として、青年採校よろしく学生対策に自称パイプとして活躍、学生の声題提起を回避し、向答無用とただ当局の権力をふりまわして学生圧殺を引き受けた。学生の言葉は彼のところでとまり、執行部まで届いていないことが後で明らかになった。先生あっしやる「理事との友情関係から自己を賭けて活躍しています。B先生は破壊された校舎を塾長に案内する役をかってきた。C先生は教授会で力強く「ケイオーラマモル」と宣言する。A先生は当局処置の事後承認をとりつけ、院生を抱きこまんがため、クラス討議に顔を出し院生の無関心を批判する。独文院生はつい慣れ親しんだ家父長的家族心情、古き師弟関係的感情にとらわれていた。そこでA先生威圧的に、「当局批判者には就職の世話は勿論、研究指導等いっさい行わない。奨学金はもらってはならない。大学から出て行きたまえ」と再三恫喝する。この発言を無視したにせよ、同席した教員は反論の一言もなかった。院生にはひびいた。その後独文は声題で真正面からとりくむことなく、当局の先代批判になってしまったからだ。隠微な弾圧を行おうとするこの発言取消しと自己批判を要求する主張と行動はクラスでは認められず、忘恩の徒のように思われたらしい。

こうして先代院生はスト反対・自主改革路線支持・権力の方向で、旧研究秩序への復帰を望み、専攻経営を快適にすることを目的とした本校内改革の道を進んでいく。

院生のストは、教員への鋭い向いであると同時に、研究室が封鎖されることにより向われた現行研究室秩序なるもの、院生自身及び院生の学向研究の営為の存り方、それを広く社会的・史的にとらえかえし、トータ

ルな科学のその歴史のつちで位置づけかえす場として、科学の全体性の回復への契機としてもあったのである。その後、阿久野院生集団が慶応の体制的質を支えてきたことを自己批判し研究活動の存り方を模索するなかで割りだしていった共同研究運動にも独文では参加がみられなかった。

学生との対決を政治家同志のようにふるまう自称用心棒A先生と同様執行部に属するD先生は、主任就任挨拶(当番発行大学報)でその時代錯誤ぶりを露呈させている。慶応のお偉方は猫も杓子も、生粋の慶応人であることを表明するために、古き福沢をもち出すが、その例にもれずD先生「福沢先生の遺された訓え……全社会の先導者となること」などと引用し、物的破壊に「ただただ憤激をおぼえるだけでした」と自ら、ヒステリックに物的破壊にのみ反応したにすぎないことを白状している。従ってそれ以上なにもいえないはずだが、臆面もなく「正しい建設的批判力を持ち……正しく勇気をもって批判を行なうために諸君は、先ず多くの書物を読み、豊かな知恵をせなえなければなりません。真剣に学問を研鑽して正しい批判力をもつものにしてはじめて改革を口にするのであります。」等さらこんなことを述べている。さらに「正常を正常と感ぜず、異常を異常と感ぜないような者はその人自身異常な精神状態にあると言われねばなりません。異常な精神をもつ者には新しい文化を創造する能力はない。」と。豊かな知恵をせなえたくせなえているだけだから)とかいう教員が今日の大学の頹廢の根源であるという大学問題の根源性を全然認認できていない。先生にとって正常とは? 日常性に埋没している文学者が、「正常を正常と感ぜず」などといって感じ方まで強いているのだからどうしようもない。せして法を守ること、そのために「自己規制をすること」と、自主規制路線を押しつけ、「人間関係に断絶をきたすことなく……勉学に励んでいただきたい」などと結んでいるが、こう述べるD先生の如き人とは親愛の情

を交すどころか、まさに断絶しなければ慶大の頹廢の危機は救われぬと申し上げたい。

全共闘の向いを受けとめ、公的に彼らへの支持を表明して行動した教師もいたが、心情的に支持するのみで、公には沈黙を齎し、「話のわかる先生として形式的な話し合いの時間を設けて授業再開へとこぎつけた教師群。学内政治勢力の力関係が関心の的であったのかもしれない。体制内改革でこまかそうとする民衆的論理による面々のその代表的証言は当番発行の大学報に寄せたE先生のむかむかさせる「精いっぱい」の願い。(1969・8)なる文である。闘争学生を諷刺するつもりでいながら、自らの説得の言葉にはひとかけらの自信もなく、没主体性まるだし、傍観者の態度はいけないと認めつつもその態度で、高みから説教がましいことを挙げつらぬ、生ける屍として死語を書き並べ、醜態をさらしている。自己の位置づけもなく、大学立法をつきつけられて「大学は大学だけですべてを解決する自信があるであろうか、学生側にも問題がある。解本しても自分だけは何人かならぬ、などといひ考えをもっているのではないだろうか。解放区といひながら結局は戦後民主主義にまもられた解放区ではないだろうか。よく考えてほしい」先生こそ考えてほしいな。さらに彼は自己の学生時代に批評家的な教師が海軍大佐で非難されるのを見て「思わず喜んで拍手をしたものだ。まったく馬鹿なことをしたものである。いつの時代でも青年はこういう傾向をもっている。……僕はまさに当時の先生と同じように……批判の矢面に立たされている。自分の過去を覗みれば、そのことだけで学生を責める気になれない。……われわれに負わされた一種の宿命のような気がする。」転倒もしいところで、青年の傾向ではなくて、丁史的にみて教員が多くが往々非難・嘲笑されるような態度をとってきたということである。宿命的などといって居直るあなたこそ今では笑われるどころか、青年

の怒りが爆発したその対象なのです。オ二次大戦終結の話に及んで「一般市民の厭戦という赤い知恵」が戦争を終らせたのであって知証人のレジスタンスや反戦はそれに及ばなかった、だから学生が真正面から権力と対決したところで犠牲になるだけで、その結果、「反対努力を挑発し弾圧への道をひらく、機動隊だけをすぬばまたよい。」鋭く勇取に向う学生に、犠牲の云々とその聖化作業に手を貸す文学者の姿を垣向見せつつ、今学生によって告発されている単なる知証の担い手の態度を、こじんまりと巨先生の如くに生きのびよと民主パバよろしく説き勧めるのである。この心やさしく学生思いの先生は「泰山鳴動して鼠一匹ならまた愛嬌がある。しかしそれがふくねよって奇妙な怪物にならないよう、それだけは避けたいものだ」と結んでいるが、機動隊導入後のキャンパスには奇妙な二面相怪物がのし歩いた。その他、専向経営に没頭する先生に、野次馬的に対応する先生。

こうした教師で占められている教授会では造反教師の処分問題に関して、事なかれ主義によって(ドイツ語教員のごく一部が先頭切って造反教師を攻撃するが)、慶応の場合は処分対象となる程の抗議行動はなかったといえ、公的な処分を行わない、それよりも目立った処分を行って学生の反発を受けることの方が心配らしい、隠微にじわじわと学生に知られないところで造反教師に圧力を加えていく方向を取るらしい。それは語学教師の場合学生となるべく接触させないようクラス担任にさせない。また少人数制の講義のメンバーに加之ないという形で表われてきている。

私の身近に見聞した教員の対応によって明らかかなように、彼らが支える現行大学秩序を通して、慶応においてはヴェトナム侵略戦争に加担する研究が許容され、医学部の医療合理化、工学部日吉移転を突棧とする技術者大量養成政策等々の、政府・独占資本の要求する研究・教育体制が強化

再編されている。これは多くの教員が、多くの知証を持ち、資料操作に熟達し、論理の構成にすぐれているにもかかわらず、その学問内容をいちじろしく無意味なものにしている研究活動の存り方、学生・人民の提起する社会的・政治的・思想的向題との関係の切断上で行われる個別研究を向いかえずことを回避している証しである。以上

田中 昌子

§ § § § § §

東京セリタ公証報告(8月10日まで)
(東本)

| 収入 | 円 | 支出 | |
|----------------|----------|---------------|----------|
| カンパ(5.4) | 1,500,- | 封筒・ゴム印 | 3,600,- |
| 積立金(中岡氏) | 20,000,- | 切手 | 17,800,- |
| より借入 発起人カンパ | 3,000,- | 「よびかけ」 印刷代 | 4,000,- |
| 入金より(7.23) | 3,000,- | 「紙・景紙」 | 1,860,- |
| 会費別納分 | 4,000,- | 小包 | 300,- |
| 計 | 31,500,- | 「声明」印刷代 | 2,000,- |
| | | 「紙代」 | 1,000,- |
| | | 景紙(1箱) | 3,500,- |
| | | 計 | 34,060,- |

'70,8,10現在 赤字2,560,-
(但し、借入金はいずれ返済するものとして)
別添③

みずからの顔面をおおいかくすために、人身御供と権力に捧げようとする岡山大・神戸大の大学執行部(学長・評議会・教授会)は、夏休みに入って、ますますその国家権力と一体不可分の本質を露呈しつつ、〈処分〉手続きを進行させている。神戸大評議会は、7・27、松下氏に対する懲戒免職〈処分〉を決定し、同31日交付。これに対して、松下氏は8・20、21に〈口頭陳述〉を行い、同24日までに〈書面陳述〉を提出する。この間の経過の詳細、および資料は、9月下旬発行の「通信3号」に詳報されるが、とりあえず本号には、8・12、神戸大学生会館で行われた「松下処分評議会紛争総決起集会」に寄せられた菅谷氏の発言を収録する。なおこの前後に、広島大腸阪氏、京大野村氏(大学を告発する全学教官連合)、九大滝沢氏、瀬口氏ら(大学変革研究者会議)による公開質問状が、神戸大評議会宛に送られ、また東大西村・折原・最首氏らの呼びかけにより、全国百数十名の署名者から送られた「血までくろうことを拒否する」声明、および5・3独文学会会員有志声明(本号同封のもの)が、8・20、神戸大評議員堀江格部氏に手交された。一方岡山では、萩原・坂本両氏による〈人事院提訴〉の公開審理が8・24～28、岡山市内、国家公務員宿舎〈玄瀬荘〉において行われるが、5・3の会会員有志は、同荘に泊りこんで、国家権力と一体不可分化した岡大当局(大学側の代理人としては文部事務官しか出てこない)を告発・弾劾して行く所存である。萩原・坂本両氏の闘争資料は、本号に同封されているが、それに対する御意見・御批判をセンター宛に、また特に萩原氏ペンフへのカンパ(100円+α)を、岡山市内山下7、好並隆司方岡山大学教員救済 宛御送付下さるようお願い致します。

新潟大では昨年11・7、佐藤信行氏らにより「新大反戦青年会」が結成され、全国大学教員戦線での、もっとも突出した、しかしもっとも着実な闘争を展開してきたが、このほど機関誌「げばなます」が創刊された。その中で、野村彰氏は次のように語っている。

「自分と衝突直さなければならぬとおもう。それほど存分に、私は過去二年ほどの間に自分を引き裂いてきた。世界の政治情勢に自分を短絡させていくことでは、引き裂かれた私の精神は活力をもちえない。科学とは何か、政治とは何か——この問いを自分にたて、それに納得できるかたちで答えるのでなければ私の精神は昏迷から一步も出られない。これらの問いをのっぴきならぬところまで、ぼくらに突きつけた学生達、という言い方は及ぼす多くの教師がいる。あるいは、その教師たちの方がもともと聡明であるのかもしれない。しかし、ひとたびこれらの問いの魔力にとらわれた私の精神は、自らの力でこの呪縛を解くしかない。……」

(文責：浅野)

沈黙はファシズムへの道、「通信」への投稿をセンターへ！
あらゆる救済へのカンパを！ 他の運動体との連帯を！

運動体機関誌 etc.

1. Radix, 大学変革研究者会議, 福岡市茶山団地83 瀬口常民方 1年(4号)分 600円
2. 大学を考へる研究者の会機関紙, 広島大学理学部岩石学研究室内 各号 30円+α
3. 僕はZZIにいる まちがいないここに, 広島大学文学部自主講座の会, 同 腸阪研究室内
4. 証言, 坂本守信編著, 岡山市内山下7, 好並方 岡大教員救済 200円+α
5. 6. 六甲, 包圍, 松下昇, 5月3日の会 東日本連絡センター 宛 各冊 100円+α
7. 原点, 原点の会, 神戸市長田区明泉寺町3-24 蔵中進方 100円+
8. 大学を告発する全学教官連合 機関紙, 京大農学部 林産工学教室内 50円+α
9. げばなます, 新大反戦青年会, 新潟西郵便局区内 私書箱145号 200円+α
10. 岡山大神戸大教員処分に反対する会, 東大教養学部進学相談室内 / 口 500円カンパ